

令和6年度
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
コレクション部会

令和7年1月29日（水）

東京都現代美術館

午前10時00分開会

知花文化施設担当課長：それではお時間になりましたので、ただいまより収蔵委員会を始めさせていただきます。

本日はお忙しい中、御出席賜りまして誠にありがとうございます。

ただいまより令和6年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会を開催いたします。

私、東京都生活文化スポーツ局文化振興部文化施設担当課長の知花と申します。議事に入るまでの進行を務めさせていただきます。

初めに、東京都生活文化スポーツ局文化施設・連携推進担当部長の富岡より御挨拶申し上げます。

富岡文化施設・連携推進担当部長：おはようございます。改めまして文化施設・連携推進担当部長の富岡でございます。

先生方、本日、大変お忙しい中御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

本美術館は現代美術館でございますけれども、本年に開館30周年を迎えることとなります。委員の皆様方には、引き続き、この美術館の活動に対して御支援いただければと思います。

本日の収蔵委員会では、当館に収蔵する資料としてふさわしいかどうかということにつきまして、専門的な観点から御覧いただきまして、ぜひ忌憚のない御意見をいただければと思います。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

知花文化施設担当課長：ありがとうございます。

御出席いただいております委員の皆様を私のほうから御紹介させていただきます。

私から見て左の席から順に御紹介させていただきますけれども、まず、青野委員でございます。

続きまして、大谷委員でございます。

続きまして、児島委員でございます。

続きまして、富田委員でございます。

続きまして、沼田委員でございます。

続きまして、出原委員でございます。

続きまして、事務局職員を紹介させていただきます。

東京都現代美術館副館長の小川でございます。

同じく事業企画課長の關次でございます。

同じく事業係長の岡村でございます。よろしく願いいたします。

続きまして、お手元の資料の確認をさせていただきます。

一番上でございますのが会議次第でございます。右上に資料番号振っておりますけれ

ども、資料1「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会委員名簿」、資料2「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」、資料3「東京都現代美術館美術資料収集方針」、資料4「令和6年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表」、資料5「作家・作品説明書」、最後に、コレクション部会の評価表ということで、最後に皆さまに評価いただく評価表をつけております。

御不足等ございませんでしょうか。ありがとうございます。

お手元の資料につきましては、現時点で未公開情報が含まれておりますので、会議終了後、回収させていただきます。

それでは、議事に入る前に、委員長の選任をお願いしたいと思います。当部会の委員長は、資料2の設置要綱第8の規定によりまして、委員による互選で定めることとなっております。いかがでしょうか。

沼田委員、お願いいたします。

沼田委員：富田委員にお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

知花文化施設担当課長：ありがとうございます。

委員長に富田委員を推薦いただきまして、御異議ないようですので、委員長は富田委員にお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

富田委員長：ただいま皆様の御推薦により、本会の委員長を務めさせていただきます富田でございます。

本日は非常にたくさんの案件がございますので、円滑に議事を進めてまいりたいと思います。御協力をどうぞよろしくお願いいたします。

では、早速議事に入りたいと思います。

まず、部会の公開について、事務局より説明をお願いいたします。

知花文化施設担当課長：当部会は、資料2の設置要綱第10の規定によりまして、原則公開となっております。

しかしながら、資料収集決定前の段階で対象資料の詳細を公開することにより、現在の資料所有者に不利益を生じさせるおそれがあること、また、資料の現物確認については所有者から参考用に借用していることから、本日の段階では議事内容は非公開とすることが適当と考えます。

なお、当部会の議事録につきましては、同要綱第10第2項の定めに基づきまして、資料収集決定の後、公開を予定しております。公開に当たって、委員の皆様にご追って内容の確認をさせていただければと考えております。また、委員の皆様のお名前と現職名につきましては、東京都のホームページ上に既に公開させていただいております。

議事内容を非公開とするには、同要綱第10第1項（2）及び第2項（2）の規定により、部会での決定が必要になります。このことについて、事務局といたしましては、委員の皆様にお諮りいただければと思います。よろしくお願いいたします。

富田委員長：それでは、コレクション部会の公開の是非についてお諮りいたします。

事務局から本日の段階での議事内容は非公開が適当との意見がございましたが、皆様、いかがでしょうか。御異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

富田委員長：では、異議がないようですので、ここから先の本部会の議事内容は非公開とさせていただきます。

それでは、事務局から資料の御説明をお願いいたします。

小川副館長：それでは、候補作品につきまして御説明いたします。

本日お諮りする作品は、購入72件、寄贈81件でございます。詳細は、事業企画課長の關次、事業企画係長の岡村及び担当学芸員から御説明を申し上げます。

關次事業企画課長：事業企画課長の關次でございます。どうぞよろしくをお願いいたします。

令和6年度東京都現代美術館美術資料の収集に当たって概要を御説明いたします。

当館は、収集の基本方針にのっとり、首都東京の現代美術館の収蔵にふさわしい作品を収集し、コレクション展示や今後の企画展の充実を図ってまいりたいと思います。また、来る30周年記念展での公開も視野に入れ、また、Tokyo Museum Collection、ToMuCoですね、こちらでの公開を通じて広く東京都コレクションの魅力を伝えてまいりたいと存じます。

今年度の作品資料の収集に当たり重点を置いてまいりましたことを御説明します。一つは、収集を担当する各学芸員の日頃の調査研究に基づき、将来の活躍が期待できる日本の若手作家の発掘支援及び中堅作家のフォローアップに努めてまいりました。また、既に当館が収蔵してきた現代美術館コレクションを歴史的、体系的に俯瞰した際に、さらにそれらの作品・作家の経過をたどれるよう、作家・作品を補完するような作品資料の充実に努めてまいりました。また、コレクションのジェンダーバランスや地域差、これらの是正に向けた収蔵調査も行ってまいりました。

具体的には、当館での個展開催を契機として、女性作家作品の収蔵を進める、また、購入を契機に御寄贈いただくなど、バランスよく作品を収蔵いたします。また、長年、寄託作品としてお預かりしていた作品、これらを寄託から収蔵へと切り替えた作品もございません。これらが今年度の収集に当たり重点的に視野に置いたこととなります。

これらの作品の詳細・概要につきましては、事業係長の岡村より御説明申し上げます。岡村係長、お願いいたします。

岡村事業係長：それでは、候補作品の概略を御説明いたします。

お手元の資料4「収集候補作品一覧表」と、資料5「作家・作品説明書」を併せて御覧ください。

資料は購入候補作品の後に寄贈候補作品がリストされております。購入に合わせて同じ作家の寄贈作品がある場合は順番が前後いたしますけれども、寄贈分も一緒にコメントさせていただきます。

最初に購入作品の1番、中村宏の作品です。1932年生まれの中村宏は、今年で93歳にな

る御高齢ですけれども、現在も現役で制作発表活動を続けておられます。

当館では、都美術館時代からの収蔵に加え、2007年の個展開催を契機に、多くの資料を含む幅広いコレクションを形成してまいりました。

今回購入候補とする「防空壕 1945」は、昨年2024年に発表された作家の最近作です。本作は、寄贈の1番から3番の絵画作品3点とともに、御自身の戦時中の記録に向き合い描いたという点で重要な意味を持つシリーズであるとともに、中村のこれまでの作品との共通項も見いだされ、その長年にわたる画業の連なりを読み解く上でも重要な作例と言えます。

また、戦時期に制作された作品を多数含む福富太郎コレクションの作品などとの対比が可能であるとともに、折しも戦後80年を迎えようとするこの時期に、絵画を通じて戦争の記憶を継承するという観点からも、これらの収蔵には大きな意味があると考えております。

続きまして、購入作品の2番及び寄贈作品の4番です。中西夏之の絵画作品です。

当館にとって開館後初めて個展を開催した日本人作家である中西夏之が、その個展に際して制作を発表した3点組の作品のうちの2点でございます。残りの1点、「柔かに、還元 I」は、さきに収蔵がなっておりますが、残りの2点については、作家の御存命中から当館に御寄託いただいております。できれば、これら3点はひとまとまりとしてコレクションに加え、今後も当館で管理・活用できればと交渉を重ねてきました結果、このたび、御遺族からの御理解をいただき、1点購入、1点寄贈という形での収蔵を御提案するものです。

続きまして、購入の3番です。恩地孝四郎によるレリーフ作品です。

1891年生まれで木版画の近代化運動を推し進めた創作版画の重要作家であり、また、日本における抽象表現の先駆者の一人として、日本の前衛芸術史を考える上でも重要な作家と考えております。

恩地の本作のようなレリーフ状の作品については、戦前のものを含めごく数点しか残されておらず、貴重な作例と言えます。当館では、恩地の絵画や紙作品を複数収蔵しており、それらとともに恩地の創作活動の理解を深めるとともに、終戦直後の前衛運動の再生を考えるなど様々な角度からコレクション展での活用が期待されます。

続いて、購入4番から9番、山下菊二の「叛軍コラージュ」連作からの6点です。

1919年生まれの山下菊二は、戦後の日本美術を考える上で重要な作家の一人ですが、当館では、これまで都美術館時代に収蔵した絵画作品1点があるのみでした。これらのコラージュ作品を加えることによって、時代の様相に向き合いながら自らの戦後を問い続けてきた画家の批評性や複眼的な思考といった特徴を示すことが可能になると考えます。また、コラージュ的な手法を取る様々な作家との対照といった切り口においても、コレクション展で様々な御紹介できると考えております。

購入の10番から27番の計18点は、タイガー立石がイタリア・ミラノに移住し活動した時期の版画作品の一式です。

別紙の詳細一覧にて、それらのイメージについても御確認いただけます。

コマ割り絵画を再構成した彩り豊かでポップな連作は、立石のグラフィカルな描写、構成力やユーモアを交えた批評性を伝えるものです。当館では、絵画作品1点と、平田実氏が撮影した観光芸術研究所の記録写真のみの収蔵にとどまっておりますので、これらを加えて次世代、次々世代の作家からも敬愛され、参照されている作家の表現力の幅を示すことができると考えております。

購入28番から29番の2点、それから寄贈の58番から69番の12点になりますけれども、いずれも野村和弘の作品です。

2019年の企画展を機に、複数作品の収蔵がございますが、そのお披露目として、今年度コレクション展で特集展示を実施いたしました際に、作家から借用して加えて一緒に展示した一式の収蔵でございます。

特集展示に際しては、展示室の回遊性を高めるようなインスタレーションが非常に効果的で、また複数作品を併せて見ることで、パフォーマンス性をはらんだコンセプチュアルな作風の理解が高まり大変好評いただきましたので、寄贈と併せて今後も活用できると考えております。

また、野村は、奈良美智をはじめ同世代で1990年代にヨーロッパ、特にデュッセルドルフに留学してキャリアを形成した作家たちの一人という点でも、既に収蔵した複数の作家たちとの対比が可能となります。

購入30番、寄贈70番と71番は、平川典俊の写真作品です。

平川は、2000年のMOTアニュアルに出品しており、その際に写真シリーズ一式を収蔵しておりますが、平川の写真作品は、一見ありふれた風景写真が、どのような場所や文脈で撮影されたかを理解することで違った意味を帯びてくるというコンセプチュアルかつパフォーマンス的な点が特徴です。

購入30番の「「死者の経路」の上空に」は、平川が2011年にトリニティ・サイトとして知られる原爆実験場を訪れ、その上空の空を撮影したもので、同年に起きた福島第一原発事故への一つの応答として、原子力開発の歴史と政治性に静かに言及するものです。

寄贈作品は2007年の制作ですけれども、こういった平川の関心が福島への即時的な反応ではなく、むしろそれを予言するものだったことを示すもので、組み合わせでの展示を想定しております。

続いて、購入31番から35番の計5点、寄贈72番から77番です。今回が新規収蔵となります白井美穂の新旧の作品でございます。

1962年生まれの白井美穂については、1995年、当館の開館記念展の出品候補作品としても既にその名が挙がっておりましたが、当時拠点がニューヨークだったこともあり、その後、展示や収蔵の機会を逸してきた作家の一人です。

昨年、府中市美術館でまとまった個展も開催され、インスタレーション、写真、絵画、映像、パフォーマンスなど特定の技法やジャンルにとどまらないその活動が改めて総体と

して再評価され、また作家の関与による整理や修復も行われました。さらに、個人の方から初期の重要な立体作品2点について寄贈のお話もいただきましたので、この機会を逃さずに、立体作品や映像、そして最近作である絵画作品までを含めまとまった収蔵ができればと考えました。

スケールの大きさや領域においても、当館コレクションにおける女性作家の多様性を押し広げるとともに、豊嶋康子らとともにモノ派の榎倉康二の薫陶を直接に受けた作家の系譜といった切り口でもコレクション展での相互参照が可能になると考えております。

続いて、購入36番から39番の計4点までと、寄贈79番は、福田尚代の作品です。

2014年のMOTアニュアルへの参加を機に、書物を素材とした作品を複数点収蔵しておりますが、本のしおりひもを素材にした繊細な立体作品や、文字に関わる文具である消しゴムを素材にした彫刻作品、また少女漫画のページを身体の部分だけを残して、それ以外の面を全て塗りつぶした平面作品といった異なるタイプの作品を加えて、作品を保管し、展示していこうという収蔵案となります。

続いて、購入40番から42番の計3点、加えて寄贈の80番は、今回が新規収蔵となります。横山裕一の作品です。

漫画の型を抜き出し利用しながら、内容よりも形式や構造を前面化し漫画表現の可能性を広げるとともに、現代美術としての批評性も備えた横山の作品は、2000年代以降の日本の現代美術を語る上で重要な表現の一つと考え、収集を検討してまいりました。

提案内容としましては、ターニングポイントとなった1995年の作品を起点に、独自の表現に向けた風景上の変化を示す紙作品3点と、187枚に及ぶ数のボード状のキャンバスに幾何学的な形を組み合わせでつくられた異形の顔のような造形をそれぞれ描いた「野獣とわたしたち」になります。

「野獣とわたしたち」は、組合せや点数を変えて多様なインスタレーションが可能となっており、空間に合わせて繰り返し形を変えて展示をすることが可能になるということです。

続いて、購入の43番です。加藤美佳の作品です。加藤美佳が、10年もの年月をかけて新たな境地を示した大作インスタレーションでございます。

大学院在学中に行った個展で鮮烈なデビューを飾った加藤美佳は、自作の人形の顔を写真撮影し、イメージを大きく引き伸ばしてリアルに描いた絵画作品で知られております。当館では、その数少ない初個展出品作「カナリヤ」と少し後の小犬を描いた「Seed」という作品を収蔵しています。もともと多作ではなかった加藤ですが、さらに出産や子育てなどを機に、長く発表活動から遠ざかっていました。本作は、そんな加藤が昨年、18年ぶりに行った個展で発表したものです。これを、美術界と離れた環境にあっても創作の手を止めはしなかった作家のこの間の集大成として評価するとともに、同じ時間と注力をかけて制作することはできない唯一無二の作品として、初期作品に加えて収蔵展示したいと考えます。

購入70番から71番の計2点、こちらも今回が新規収蔵となります松井えり菜の絵画作品です。

松井えり菜は、1984年生まれで、まだ40代に入ったばかりですが、松井も早くに頭角を現し、キャリアの初期から評価を得て、発表歴は20年以上になります。当館では、複数の企画展に出品があったものの、収蔵の機会を逸しておりました。松井もまた、2018年に出産というライフステージの変化を経験しており、これらの作品には、初期作品から連なるモチーフや描写法を残しながらも、子育てと制作の両立を図る上での葛藤や模索が見て取れます。制約がある上に、自己の創作欲求と向き合う濃密な時間をかけて描かれた2点は、作家のさらなる飛躍が予見されるキャリアの重要な試金石と評価し、コレクションに加えたいと思います。

申し訳ありません。番号が飛んでしまいましたけれども、松井えり菜の前に購入の44番から51番、それから52番から69番は、それぞれ連作で、ユアサ エボシのコレクション作品の一式です。

ユアサ エボシの作品は少し説明が難しいのですが、御本人は1983年生まれの現代作家でいらっしゃいますが、ユアサ エボシという1924年に生まれて1987年に亡くなったという想定で、大正生まれの架空の三流画家に御自身が擬態する形でつくられた作品を発表されるという、コンセプト的な文脈をつけた上で作品をつくられている方です。

非常に大きな絵画作品等を展開をされている方ですけれども、今後の展開とコレクションとの対話のような形の展示の手がかりとして、ユアサの創造活動の基本となりますコレクションの作品の一連のシリーズを加えたいと思っております。

続きまして、購入の72番、ヴィクトル・パリモフが1920年に東京、大阪、京都で開催した「日本に於ける最初のロシア画展」に出品した絵画作品です。

サイズや当時の販売価格、また目録に図版が掲載されている数少ない作品の一つであることから、出品作におけるパリモフの代表作と考えられます。長く個人のお手元にあったもので、収蔵後に補修等は要すると思われそうですが、主たるイメージ部分は欠落なく残っております。未来派のグローバルな視点での検証が進む中、既に収蔵している2点のパリモフ作品をはじめ周辺の作品や資料と合わせて今後の研究や展示に資するところの大きい収蔵になると考えております。

続いて、今回寄贈のみとなる作品について順に説明いたします。

寄贈の5番から37番の計33点は、戦前戦後を生きた版画家、彫刻家として知られる鈴木賢二の木版画一式となります。

これらは、当館が2019年に収蔵した市井の「物売りたち」を描いた1959年頃の制作のスケッチ一式を基に1966年頃につくられた木版画です。これらを加えることで、原画スケッチと木版画との表現の違いなどを対照にする展示が可能になります。

続いて、寄贈の38番です。実験工房に参加していたことでも知られる作曲家で造形作家の佐藤慶次郎の作品です。

神戸市立青少年科学館に35年にわたり常設されていた作品を、展示室のリニューアルを機に撤去することになったため、御寄贈のお話を頂戴いたしました。非常にシンプルな原理でつくられており、状態もよく、当館所蔵の実験工房の作品に加えて、テクノロジーとアートの間を考えるとといった視点での展示活用もできることから、ぜひ収蔵したいと考えます。

寄贈の39番に移ります。こちらは、秋山祐徳太子の活動にひもづく資料の一つで、これまで複数年にわたって収蔵してきた資料群に加えこれを補完するものです。

続いて、寄贈の40番から41番、合田佐和子の初期のマスク作品2点でございます。

昨年度に、合田佐和子についてはまとまって収蔵させていただいたんですけども、その際、一緒に検討していた寄贈のオファーでございますが、調査と交渉が間に合わなかったため、今年度に持ち越しました。作家を知る個人の方からの御寄贈です。

寄贈の42番から45番は、彦坂尚嘉がフィラデルフィアに滞在中に制作した版画3点と関連資料です。個人宛てに作家から贈られたものでございます。

図版が4点まとまっており、これはこの形で個人の方が保管されていたという形を示すものですが、ばらばらでの展示も想定しております。

45番と42番は、同じ版で刷られているのですが、45番のほうには私信が書き加えられており、状態もほかの3枚と違うため、作家にも確認し、この1点のみ関連資料とみなして区別しております。

続いて、寄贈の46番から48番は、石内都が、晩年の大野一雄を撮影したシリーズのうちの3点です。既に収蔵した同シリーズ10点は、もう少し大きい、カットとサイズが異なるものなのですが、これの一回り小さいサイズの3点を合わせて活用できるようにと作家御本人から御寄贈のお申出をいただきました。

寄贈49番に移ります。こちらは、山中信夫の関連資料です。

ピンホールカメラを使ってニューヨークで撮影した「マンハッタンの太陽(19)」と、同じイメージがプリントされた印画紙に、山中の、友人の坂口登と夫人に当てた私信が書き加えられているものです。後に坂口氏から譲り受けた個人のお手元にあったものを、「マンハッタンの太陽」シリーズについては当館収蔵がございませんので、ほかの作品と合わせて活用できるのではないかとということでお受けしたいと思っております。

寄贈50番から57番の計8点は、イケムラ レイコのドローイングです。

一昨年度はまとまった収蔵がかないまして、現在、コレクション展で早速展示、お披露目をしてございますが、この特集展示の機会に合わせて、作家御自身が選び、今後も一緒に展示ができるようにと御寄贈のオファーをいただきました。うち7点は現在展示中ですので、後の展示室にて実見いただきます。

寄贈81番、こちらが最後になります。ジャデ・ファドジュティミの作品です。

ファドジュティミは、ナイジェリア系移民の両親の下、ロンドンで生まれ、ロンドンで絵画を学びました。大胆な筆致と色使いで早くから注目され、史上最年少でテートモダン

に作品が収蔵され話題を呼んだことでも知られております。

彼女は、自身のルーツであるアフリカ系文化とともに日本の文化、とりわけアニメやビデオゲーム、ファッションなどから影響を受けてきたと公言しています。2016年には交換留学で京都に滞在し、その後、定期的に来日して日本の文化や作家たちとの交流を続けてきました。

欧米圏にルーツを持つ作家たちへの注目度が高まる近年のグローバルな動向について、当館では、参照点となるような収蔵はなかなか体系的にはできていない中ではありますが、近年の一つの手がかりとして、また、本作は東京で彼女が描いて京都で発表した作品であることも加えて、国内の美術シーンと海外動向との交差例として、寄贈という形ではありますが、コレクションに加え活用していきたいと思っております。

以上、概略でございます。恐らく作品を実見いただいたほうがイメージとして定着するのではないかと思います。

詳細は引き続き、実見をしながらお話しさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

富田委員長：それでは、個々の作品への御質問は作品を見ながらということで、それ以外に何か现阶段で御質問等ございますか。

では、これから作品の実見に参りたいと思っております。

(委員離席)

(作品実見)

(委員着席)

富田委員長：それでは、作品を皆さん御覧になりましたが、それぞれのところで御質問も出ていたようですけれども、何か聞き忘れたこと、そのほか、ここでお尋ねしておきたいことはございますか。よろしいでしょうか。

それでは、意見交換に移りたいと思っております。

まず、各委員に評価表の記入をしていただきたいと思います。作品の評価方法等について、事務局から説明をお願いいたします。

知花文化施設担当課長：説明させていただきます。

お手元の評価表を御確認いただければと思います。

評価表には今回の収集候補作品が一覧で記載されておりますけれども、作品ごとにA、B、Cの3段階で評価をいただきます。Aは「収蔵すべきである」、Bは「収蔵してよい」、Cは「再検討を要する」ということで、ABCいずれかに○をつけていただければと思います。

委員の皆様の御記入後、評価表を回収させていただき、事務局で確認いたします。

評価方法の説明については以上です。

なお、確認の結果、C評価がついた作品があった場合は、後ほど理由をお伺いさせていただきます。よろしくお願いいたします。

富田委員長：皆様、よろしいでしょうか。

では、御記入をお願いいたします。

(委員 評価表記入)

富田委員長：C評価はなかったということでございます。

では、委員の皆様から総評を一言ずついただければと思います。

では、青野委員からお願いできますか。

青野委員：非常に充実したラインナップで、堪能させていただきました。

一つだけ思いましたのが、やはり保存が大変だろうなど。ある程度経年劣化していくのをよしとして保存せざるを得ないものと、今の状態の維持に使命感を持って当たらなければいけないようなものと両方混ざっているような気がしました。その辺を案配していくのは大変ですが、本当にすばらしい作品群だと思います。

それから、展示の前に修復が必要なものも見受けられました。そういったものはもちろんお分かりですが、どうぞよろしくをお願いいたします。

非常に充実したラインナップで堪能させていただきました。

富田委員長：ありがとうございます。

大谷委員、お願いします。

大谷委員：私も大変面白く拝見させていただきました。もっとじっくり見たかったのですが、でも、また展示の際に楽しみにしております。

歴史的に重要なものから、本当に最新の若手の方まで非常にバランスの取れた形で、すごく詳しくリサーチして収集されているなど思いました。今回とてもよかったなと思ったのは、佐藤慶次郎のような作品を救い出すことができたことです。やはりパブリックな作品が、ある一定の時間が過ぎた後、どうにもなくなってしまうようなケースが多々あるときに、美術館がこのような形で受け入れることができるのはとても大事なことで、よかったなと思いました。

以上です。

富田委員長：ありがとうございます。

児島委員、お願いします。

児島委員：本当に様々な作品を堪能させていただきました。

中村宏さんのように、戦後史の中で特定の時代の作品がとても有名な方だと、その時代の作品しか見る機会がないことが多いんですけども、近作もきちんと収蔵されたのがとてもよかったと思います。

それから、白井さんなんかもそうですけれども、様々な制作活動をされている方の作品を——加藤さんもそうですね——トータルで見せられるような形で収集の方向性をつくっていらっしゃるというのがとてもよいことだと思いました。

イケムラさんの展示をこの間拝見しましたが、ちゃんとした展示ができるように持っていくというのをまた楽しみにしております。ありがとうございます。

富田委員長：ありがとうございました。

沼田委員、お願いします。

沼田委員：私も大変充実した収集の作品を見まして感銘を受けました。

最初にお話しいただいた収集の方針といいますか方向性が本当に守られていて、皆さんが広く目配りされて収集されているのを感じました。若手作家の発掘、ジェンダーバランス、それから中堅作家のフォローとか既収作品の中で欠けているものを拾い出していくというようなことで、特に白井さんの作品などは、今までなかなか収集の中から漏れていたというものを、まとまった形で収蔵できてとてもよかったなと思いました。ありがとうございました。

富田委員長：ありがとうございました。

出原委員、お願いします。

出原委員：平川さんのように、あまり最近では日本では発表していないような作家をフォローしているとか、あるいは加藤美佳さんのように、本当に昨年発表した作品を収集するという、かなり思い切ったことをやっているなと思いました。本当にいろいろなことに目配りをされていて、すごいなと感じました。

青野委員と全く同じで、やはり保存が大変だと思います。たわしがどうなっていくのかなというのが心配ですし、本当にコーティングしていくのか、どうするのかとかいろいろあると思うんですけども、保存・修復の人と一体化して詰めていって、東京都現代美術館がずっと長く保存していただければというふうに特に思います。どうぞよろしくお願いします。

富田委員長：ありがとうございました。

私からも一言だけ。今回の内容は非常に充実していました。これだけのいいものを集めてくるには、日頃からの調査とか、作家あるいはコレクター、画商さん等と学芸員の方とのお付き合いを丁寧にやっておかないと、なかなかいい情報はやはり入ってこないの、そういうところを普段から非常にしっかりやられているんだろうなということを感じました。

学芸員の仕事は、美術館の中だけで行う仕事ではない。特に現代アートの場合は、外での仕事の方が非常に多いと思いますので、ぜひそういう状況を事務局の皆様も御理解いただいて、これからも学芸員が自由に飛び回れるように環境を配慮していただければと思います。

個人的には、恩地孝四郎さんとパリモフの作品2点は非常に重要な作品だと思いましたし、加藤美佳さんの作品のかけられた時間を思うと本当に圧倒される。非常に作品を見ていて感動いたしました。すばらしい収集であったと思います。

それでは、これまでの意見交換を踏まえて、評価表の内容を変更したいという方はいらっしゃいますか。よろしいでしょうか。

ほかに何か御発言ございますか。よろしいですか。

では、これもちましてコレクション部会を終了したいと思います。

委員の皆様、ありがとうございました。

では、事務局にお返しいたします。

知花文化施設担当課長：富田委員長、ありがとうございました。

冒頭に説明させていただきましたけれども、資料については机上に置いたままにしていただければと思います。

これもちまして、令和6年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会を終了いたします。

委員の皆様、本日は本当にありがとうございました。

午後0時10分閉会

以上